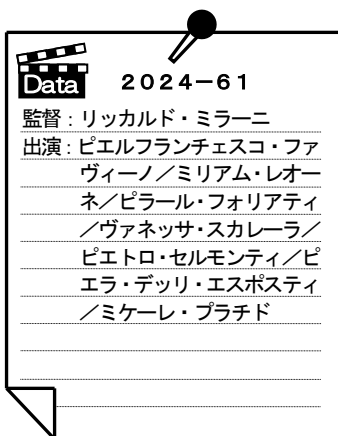




👁️👁️ みどころ

80-90年代のゆるやかな衰退期を経て、“イタリア式喜劇”が21世紀に量・質とも劇的に復活！『イタリア式離婚狂想曲』（61年）を知らなくても、本作を観れば、その意味と楽しさが理解できるはずだ。ドン・ファンは17世紀のスペインの伝説的なプレイボーイだが、スポーツシューズメーカーの経営者（独裁者？）として君臨する主人公は、49歳のプレイボーイ。もちろん身を固めるつもりはなく、夜な夜な女をオトすことを日課として楽しんでいたが、ある日、ある美女から「車椅子の身障者」だと誤解されると・・・。

イタリア式狂想曲は、そこからが本番。車椅子がここまでドタバタ喜劇の小道具に使われることにもビックリだが、「車椅子美女」のバイオリンの腕前、車椅子テニスの腕前にもビックリ！そして何よりの驚きは、男女の恋はゲームとしか考えず、プレイボーイ人生一筋を歩んできた主人公が、いつの間にか“本気モード”になっていくこと。これは一体なぜ？

協奏曲はバランスよく美しいメロディーを奏でるが、本作に見るドタバタ狂想曲はさて如何に？ドタバタギャグではなく、上品な笑いの中にしっかり人間模様の真実を散りばめたイタリア式狂想曲の良質な出来に拍手！

———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ————

■□イタリア式喜劇が劇的に復活！なるほど、なるほど■□

私の中学高校時代（1961～67年）と大学時代（1967～71年）のフランス映画、イタリア映画は面白かった。その面白さは、ある意味でハリウッド映画以上だった。そんな時代のフランス映画を代表する俳優は、アラン・ドロンやジャン＝ポール・ベルモンド、そしてカトリーヌ・ドヌーヴやブリジット・バルドー、イタリア映画ではなんといってもマルチェロ・マストロヤンニとソフィア・ローレンだった。

そんな時代に「イタリア式喜劇」という言葉があったことを、私は本作パンフレット掲載の野村雅夫氏（ディスクジョッキー／翻訳家）による『戦後イタリア映画史に刻まれた新たな潮流 イタリア式喜劇』を読んで初めて知った。そこには、「これはひとつのジャンルを示すというよりは、イタリア映画史においてのひとつの潮流であり、複数のジャンルにまたがる、笑いをベースにした作品群をゆるやかに総称する呼び名と捉えると良いだろう。ピエトロ・ジェルミの傑作『イタリア式離婚狂想曲』（1961 年）にその名称は由来するとされるが、該当するようなものは 50 年代から生まれて花開き、70 年代半ばにはその勢いを失って、80 年代初頭からゆるやかにしぼんでいった。」と書かれている。私は『イタリア式離婚狂想曲』は見えていないが、当時愛読していた『スクリーン』と『映画の友』からの情報としてその映画は知っていた。

しかして、「イタリア式喜劇」は「80-90 年代のゆるやかな衰退期を経て、21 世紀に、量・質とも劇的に復活！」したらしい。なるほど、なるほど。本作を観て、私もその説に全面的に納得！

■□■今年の夏はなぜかイタリア映画月間に！この俳優も！■□■

プレイボーイ役がぴったり似合う美男の俳優は日本にも世界にも多いが、本作で 49 歳で独身、スポーツシューズメーカーの経営者のプレイボーイ、ジャンニ役を演じたのは、ピエルフランチェスコ・ファヴィーノ。と聞いても、私には全然ピンとこなかったが、2024 年 7 月 15 日に観たイタリア映画『潜水艦コマンダンテ 誇り高き決断』（23 年）で艦長役を演じた俳優、そして 2024 年 8 月 10 日に観たマルコ・ベロッキオ監督の 340 分の大作、『夜の外側 イタリアを震撼させた 55 日間』（22 年）の前作にあたる『シチリアーノ 裏切りの美学』（19 年）（『シネマ 47』81 頁）で、イタリア映画における最高の名誉とされるダヴィッド・ディ・ドナテッロ賞主演男優賞を受賞した俳優だと知ると、なるほど、なるほど。なぜか 2024 年の夏はイタリア月間になったし、俳優ピエルフランチェスコ・ファヴィーノのオンパレードになることに・・・。

■□■“恋愛と障害者”という難テーマをイタリア式喜劇で！■□■

ドン・ファンは好色放蕩な美男＝プレイボーイの代表として有名だが、現代のイタリアで今なお現存している 49 歳の独身男にして、シューズメーカーの代表取締役（独裁者？）ジャンニはまさに 21 世紀イタリアのプレイボーイの代表だ。彼の価値観では、恋愛はゲームに過ぎないばかりでなく、女はオトすまでのプロセスを楽しむ魅力的な存在と定義しているらしい。そのため、本作はポルノ映画ではないが、冒頭はそれを彷彿させるようなベッドシーンの連続に。

他方、彼がそんなプレイボーイに成長した背景には、両親の離婚問題、双子の兄弟の価値観の対立、早くからの自立心の芽生え等々があったようだが、そこらの分析は専門家に任せ、本作では、とにかく女をオトすことに至上の価値を見出す男ジャンニのキャラに注目！

■□■この設定にビックリ！どう見ても姉と妹は逆！？■□■

本作の本格的ストーリーが始まるのは、次から次へと狙う女を変えるジャンニが、亡き母親のアパートで遺品の車椅子に座しているところを、引っ越しの挨拶にやってきた若く美しいアレッシア（ピラール・フォリアティ）に目撃されたところから。車椅子が必要な男だと勘違いされたジャンニは、それを利用してアレッシアをオトそうと決意したが、アレッシアの方は、ジャンニを車椅子生活を余儀なくされている姉のキアラ（ミリアム・レオーネ）の“お相手”にしようと計画したから、アレレ、アレレ……。本作はそこから面白い展開が次々と続いていくので、それに注目！

それにしても、『潜水艦コマンダンテ 誇り高き決断』であんなに深刻な艦長役をシリアスに演じていたイタリア人の俳優ピエルフランチェスコ・ファヴィーノが、本作ではこんなに軽妙に 49 歳のモテモテ男、日本風に言えばチョイ悪オヤジを演じ分けるとは！演技の世界、映画の世界は面白いものだ。本作がお見事なのは、ピエルフランチェスコ・ファヴィーノの演技だけでなく、その軽妙な演技に見事に波長を合わせてイタリア式喜劇を完成させていく姉役のミリアム・レオーネと妹役のピラール・フォリアティの演技だが、私の目にはどう見ても、この姉と妹は逆！

■□■いつ恋愛ゲームが本気モードに？その契機は？理由は？■□■

私はいわゆるお笑い芸人による、お笑い売るためのギャグの連続が大嫌い。人気のギャグになったり、人気のコマーシャルになっているものも多いが、それを見るたびに私は、平和な国ニッポン＝バカな国ニッポンと思ってしまう。したがって、本作でも現代版ドン・ファンたるジャンニが女漁り続け、仲間たちにその自慢話をしていくだけの物語なら全然面白いと思わないが、私が本作を面白いと思ったのは、そんな正真正銘の女たらしで、女をオトすのはあくまで恋愛ゲームだと信じ込んでいる男が、50 歳を目前にしてなぜか本気モードになってしまうところだ。

もちろん、ジャンニにとっての車椅子は、ジャンニのことを車椅子が不可欠な障害者だと錯覚しているアレッシアとの恋愛ゲームを続けるため必要なアイテムに過ぎない。しかし、交通事故によって下半身に麻痺が残ったキアラにとって、車椅子は生涯不可欠なものだ。ジャンニはもともとそんなキアラと恋愛ゲームを展開するつもりはなかったが、ある日「キアラをモノにしてみせる」と宣言してしまうと、それにも励んでいくことに……。しかし、恋愛ゲーム（女オトしゲーム）が得意だったジャンニでも 2 股掛けは慣れていなかったようだ。また、車椅子という小道具の使い方も難しかったようだ。さらに、アレッシアの方もさるもので、キアラのため様々な恋のテクニックを……。

本作におけるキアラは、車椅子生活ながら自己肯定性と前向き性、積極性が素晴らしい上、もともとさまざまな才能に恵まれていたらしい。したがって、天性の美貌の他にバイオリン演奏から車椅子テニスまで、なんでもトップレベルだからすごい。もちろん、ジャンニはキアラのそんな才能にびっくりするとともに惚れ込んだのだが、それはあくまでゲ

ームの延長としてのもの！私はそう思っていた。ところがスクリーンを見ていると、アレレ、アレレ。いつのまにか、そしてなぜか、ジャンニのキアラに対する恋愛モードがゲームからモンモノに？それは一体なぜ？その契機は？その理由は？それはあなた自身の目で、鑑賞する中でしっかり考えてもらいたい。

■想定通りの結末だが、もう1つのエピソードにも注目！■

21世紀に量・質とも劇的に復活した“イタリア式喜劇”たる本作のテーマは、健常者と身障者との恋、そして、そのストーリーを繋ぐ小道具が車椅子だ。アーネスト・ヘミングウェイの原作をゲイリー・クーパーとイングリッド・バーグマンの主演で映画化した『誰が為に鐘は鳴る』(43年)では、キスの仕方也不知道の乙女の MARIA は「キスをするのに鼻はどうするの？」と初々しく質問していたが、本作を見ていると、車椅子の恋人同士がキスをするには、どうすればいいのかが本当に問題に思えてくる。恋愛をゲームとしてしか考えていないジャンニは、男友達(悪友たち?)から「車椅子同士の男女のセックスはどうするのか？」と質問されていたが、さて、それに対する彼の答えは・・・？それはともかく、本作では、健常者×車椅子の身障者との恋、車椅子の身障者同士での恋のあり方が、イタリア式喜劇の中で面白く描かれ、予想通りハッピーエンドを迎えていた。

しかし、それと同時に本作で見逃してはならないのは、成功したスポーツシューズメーカーの社長として、公私共に独裁的な行動が目立つジャンニが当初、あからさまな身障者への差別発言を示していたこと。それは、「身障者への配慮を会社の新しいセールスポイントにしよう」という意見を積極的に提案した女性社員を、あからさまに切り捨てた上、即時解雇してしまうという冒頭でのシーンだ。そんな行為は日本の労働基準法では決して許されないが、イタリアではそんなことが OK なの？イタリア式狂想曲(劇)が展開している中、私はそのことをすっかり忘れていたが、本作は健常者と車椅子の身障者との恋がハッピーエンドになるという予想通りの結末の他、あの女子社員が会社へ復帰するという素晴らしい副産物(サブ・ストーリー)も用意されているので、このもう1つのエピソードにも注目！

2024(令和6)年8月16日記

「幸せのイタリアーノ Corro da te」(イタリア映画・2022年)

洋2024-61 ★★★★★

<テアトル梅田>

2024(令和6)年8月12日鑑賞

2024(令和6)年8月16日記

監督:リッカルド・ミラーニ

出演:

ジャンニ(49歳で独身のプレイボーイ) / ピエルフランチェスコ・ファヴィーノ

キアラ(アレッシアの姉、ヴァイオリニスト、車椅子テニスのプレーヤー) / ミリアム・レオーネ

アレッシア(キアラの妹、訪問ヘルパー) / ピラール・フォリアティ

医師ダリオ / ピエトロ・セルモンティ

秘書ルチャーナ / ヴァネッサ・スカレーラ

キアラとアレッシアの祖母 / ピエラ・デッリ・エスポスティ

ジャンニの父 / ミケーレ・プラチド

配給: オンリー・ハーツ / 113分